葛尾村の健康増進支援

郡山女子大 栄養管理や診断実施

健康ふくしま

郡山女子大（郡山市）は葛尾村民の健康づくりや生活習慣病の予防、改善を支援する取り組みに乗り出した。栄養管理や食品成分分析などの専門的な知識を持つ同大の教員が、村民の健康状態と食生活の関連を調査・分析し、効果的な栄養指導につなげる。村の特産品「エゴマ」を使ったレシピも作り、健康増進に生かす。

健康増進に向けた取り組みについて話し合う郡山女子大の教員

活動の第一段階では、同大食物栄養学科の教員と村が食物摂取頻度調査と健康診断を実施した。健康な住民と糖尿病や高血圧症など生活習慣病患者や予備軍の日常の食事、生活実態を解析する。結果を基に、具体的な栄養指導や料理教室の開催などを繰り広げ、食生活の改善、習慣付けに役立ててもらう。

同大は村内で、高い健康効果があるとして注目されているエゴマの栽培拡大や高品質化に取り組んでいる。村民の健康促進に向け、動脈硬化を抑える作用を持つ成分などを含むエゴマを日々の食事で手軽に取り入れられるメニューを考案し、周知する。

同大の岡部聡子准教授は「村の保健師などと連携しながら効果的な健康指導に結び付けたい」と話している。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の発生後、県内では健康指標の改善が課題となっている。福島医大が葛尾村民四百七十一人を対象に実施した健診結果の分析によると、肥満者の割合は震災前は33％だったが、震災後は45％に増加した。高血圧者は50％から62％に増えた。

村は原発事故に伴う避難で生活環境が変わったことなどが健康指標の悪化の背景にあると見ており、村を挙げてさまざまな健康事業に力を入れている。

いわき市議会 議長に大峯氏有力

大峯英之氏

いわき市議会の改選後の新議長は二十七日までに、最大会派の志帥会の大峯英之氏（五九）＝自民＝が有力となった。十月七日に開かれる予定の臨時議会で選任される見通し。

改選後の会派構成は議員三十七人のうち、志帥会が十一人で第一会派となる見込み。関係者によると、同会が大峯氏を議長に推す方針を固めたほか、複数の会派の支援を取りつけたもようだ。

大峯氏はいわき市出身、磐城高、法政大経営学部卒。現在三期目で、十三日投開票の市議選で四選を果たした。志帥会の会長を務めている。

副議長ポストは、各会派間で水面下の調整が続いている。

安積高生が復興状況学ぶ

原発事故後の浜通り訪問

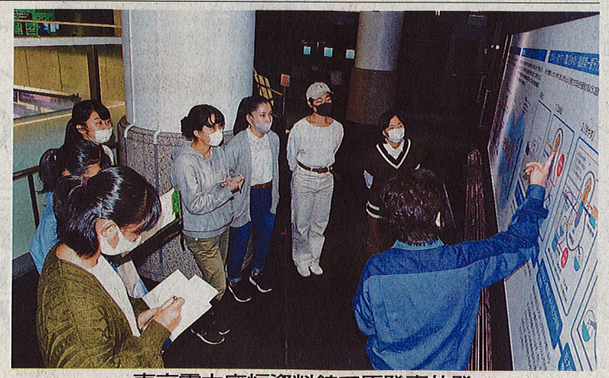
郡山市の安積高の生徒は二十七日、双葉町や富岡町を訪れ、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興の現状に理解を深めた。

原発事故当時の記憶がない生徒が増えている中、自らの言葉で震災を伝えることのできる人材になってもらいたいと企画した。生徒二十四人が参加した。

参加者は双葉町を訪れ、町建設課の猪狩浩課長の案内で震災の爪痕が残る町役場や双葉南小を見学した。富岡町の東京電力廃炉資料館では、原発事故発生当時の状況や原発構内の汚染水対策について学んだ。

最後にJヴィレッジ（楢葉・広野町）で振り返り会を開いた。広野町のNPO法人ハッピーロードネットの西本由美子理事長らの講話に続き、グループ発表を行った。生徒が今後の復興の方向性について考えを発表した。

吉田峻真さん（二年）は双葉町の訪問を振り返り、「復興に向け建物の取り壊しが進んでいる場所がある一方で、時間が止まったままの地域もあり、多くの課題が残っていると感じた」と語った。



東京電力廃炉資料館で原発事故発生当時の状況に理解を深める生徒

浜通りの食や観光PR

常磐線全線再開企画 JR仙台駅でマルシェ

トマトなど浜通りの食べ物を販売したマルシェ

浜通りの食や観光をPRする「ふくしま浜街道マルシェ」は二十七日、仙台市のJR仙台駅東西自由通路（杜の陽だまりガレリア）で催された。

JR東日本水戸支社が今年三月の常磐線全線再開を受けて企画した。みそ漬処香の蔵（南相馬市）の「クリームチーズのみそ漬」、ワンダーファーム（いわき市）のトマト、いわきチョコレート（同）のメヒカリをかたどったチョコレートなどを販売した。

相馬野馬追で身に着ける甲冑（かっちゅう）を展示し、モニターで浜通りの観光名所を紹介する映像を流した。

最大16メートルにかさ上げ

第一原発の新防潮堤

日本海溝地震想定し備え

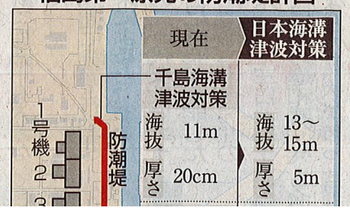
東京電力は、日本海溝沿いの巨大地震による津波に備えた福島第一原発の防潮堤の建設計画を公表した。現在の防潮堤は千島海溝地震などの津波を想定し、仮設も含めて最大で海抜一一・八メートルだが、最大十六メートルにかさ上げされることになる。

東電は原発事故が起きた二〇一一年、日本海溝の外側で発生する「アウターライズ地震」に備え、4号機東南側に仮設防潮堤を設置した。砕石や遮水シートを組み合わせたもので全長約四百メートル、海抜一一～一二・八メートルにした。

1～4号機の海側でも、千島海溝津波を想定して全長約六百メートル、高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の最終処分場選定の文献調査応募への動きを巡り、二〇〇七年に高知県東洋町が応募した際の元高知県知事、橋本大二郎氏（七三）が二十七日までに取材に応じ「国は餌すったもんだを任せている」と批判した。

処分場選定の第一段階である文献調査を受け入れた自治体には国から二年間で最大二十億円の交付金が支給される。調査入りには自治体の応募のほか、国

福島第一原発の防潮堤計画



将棋

説論

言葉は、世代を問わず共感を呼ぶ。厳しい勝負の世界で輝く十八歳の姿を、子どもたちはお手本にしてほしい。

藤井さんは五歳のころ、祖母からもらった将棋セットで駒の動かし方を覚えた。二〇一六（平成二十八）年十月、十四歳二カ月でプロ棋士になり、デビューから二十九連勝。「望外」「僥倖（ぎょうこう）」と古風な言葉で思いを表した。今年七月に渡辺明棋聖を破って十七歳十一カ月で初タイトルを獲得。八月には木村一基王位に

光る探究心と謙虚さ

金を繰り出して攻め、強力な攻め駒の飛車を捨てて一気に敵陣に迫る。盤上には数々の名場面が生まれた。現在、将棋の研究には進化するAI（人工知能）が活用される。勝負どころで藤井さんが二十分ほど考えて指した手は、AIが六億通り読んだ末にたどり着いた。

プロだけでなく一般のファンも驚かせ、楽しませる手が飛び出すのが魅力だ。守りの肩がなくなった。藤井さんはその間、自宅で一日六時間ぐらい研究に没頭し、実力を磨いたという。雑誌のインタビューで「じっくり、自分の将棋を見直した」と明かしている。生活が制約される中でも努力を怠らず、自粛期間をプラスに変える姿は、受験勉強などに取り組む中高生の刺激になるだろう。

本紙「みんなのひろば」欄には、藤井さんの活躍をたたえる世代など、投稿者は小学生から九十代まで幅広い。県内の将棋関係者にはこの機を逃さず、さらに普及を進める努力を望む。

子どもからお年寄りまで、同じ土俵で戦い、楽しめるのが将棋や囲碁の特徴だ。今はインターネットを通じて手軽にルールを覚えたり、遠くの人と対局したりできる。天才の活躍を見るだけでなく、多くの人が将棋や囲碁を覚え、伝統のゲームの楽しさを受け継いでほしい。（佐藤　克也）

執筆陣をホームページ（http://www.minpo.jp/）